

娘と自転車で考える

上村 英明

一歳になった娘は、つかまり立ちを卒業して歩きまわるようになった。自然と散歩に出ても、公園中を縦横にあるさまわっている。行動半径も大きくなって、ベビーカーで往復できる範囲から、自転車に補助イスをつけて遠くの公園にまで足をのばすようになった。三時から塾の仕事を始める私は、午前中は自由になることが多く、午前の散歩を一週間の二分の一は、担当している。

幼児用の補助イスは何か工夫できないか。

娘を自転車で公園まで連れ歩きはじめて、いろいろと考えることがあった。

まず、最初に補助イスの問題である。補助イスは、妻

が近所の自転車屋で着けてもらったのだが、ハンドルの手前につける。標準的なものだそうだ。娘をのせて近くの駐車場で試運転してみると、どうもぎこちない。よくみると、ひざが補助イスにぶつかるのである。自慢ではないが、私の足は短足の代表みたいなものだ。足のせいではないとすると、サドルと補助イスの位置関係の問題か。補助イスの取り付け位置を変えればとやってみたが、それも無理そうであった。

その後、公園などに止めてある補助イス付きの自転車をシゲシゲと観察したが、補助イスの位置は似たりよったり。運転技術でカバーするしかないと思を決したが、運転技術を向上させるということは、一言でいえば、ガ

ニ股で自転車をこぐということである。かっこうを気にする私ではないが、ガニ股でこいでも、カーブを切る時に足が補助イスにかなりの頻度でぶつかってしまうということである。危うくバランスをくずしてヒヤッとしたことが何度もあった。さらに、何かの拍子でペダルから足はずした時に、もう一度ペダルに足をかけ直すのが、結構たいへんなのである。

我が家が位置する東京、江戸川区の南部一帯は、自転車道が整備されていない。せまい車道に、さらにせまい歩道が申し訳に付いているだけである。結果的に、娘と私は、車道を通ることも多い。車とすれ違うたびに急停車することもある。かなり緊張度の高い運転を強いられる。もちろん一才前後の幼児は、運転者の前にすわっている方が、なにかと便利である。しかし、前輪の上のバスケットを脱着可能にして補助イスを運転者向きにとりつけることなどはできないだろうかといつも思う。

自転車の上で街づくりを考える

街に緑が少なくなったといわれている。しかし、何故緑が必要かといわれると、都市生活者としては殺風景になったと感性の問題を訴えるくらいのもだろう。もちろん感性の問題も大切であるが、さらに加えて、木かげの必要性を最近はとみに感じるようになった。

娘と私が自転車をよくでかける区立F公園は、我が家から環状七号線を自転車でゆっくりと20分くらい南下しなければならぬ。その20分の道すがら、木かげというものほとんどないのである。七、八月の炎天下ともなると、娘にもそして運転手の私にもこの20分はかなりきつい。もちろん、娘には麦わらぼうしをかぶせてはいるが、娘は帽子というものがいやでいやでたまらないようだ。自転車にのってビュービュー顔に風があたっているのが好きな娘は、汗をビッショリかきやすい頭や髪も風ですずしくしていたいとしゃちゅう手で帽子をとろうと努力している。

特に横断歩道の手前には、木かげがほしい。一カ所だけある木かげに來ると横断歩道が赤でなくとも自転車を

とめて、娘の帽子をとってホッとすると同時に、私もひと息つくささやかな瞬間である。木かげのない横断歩道では、これと対照的にジリジリとしてくる。『早く、青に変わらないか』と、陽炎の立つ路面をにらみつける。

大きな緑地帯をつくり市民の公園にするのもよい。グリーンベルトや小さな花壇を作るのも必要だ。しかし、もうひとつ、横断歩道のある交差点のすみずみに大きな木でも植えたらどうだろう。炎天の日は、涼しい木かげを、にわかには降りはじめた小雨には一時の雨やどりの場所を提供してくれることうけあいである。街は、屈強で元気な若者あるいは中年の男性だけのためにあるのではない。幼児や病人、障害者が、木かげのない、アスファルトの照りかえしで陽炎のゆらめく道路を一時も歩けるものではない。道路をつくるなり、街をつくるなりに、こうした複数の視点がほしいと痛切に考えている。

私たち親子が以前住んでいた地域にはたいへんりっぱな自然公園風の大人工公園があった。遊歩道を兼ねたジ

ョギング・コースがあり、池があり、各種の樹木が子供たちの観察用にと植えられていた。管理もしっかりしていて、公園内の清掃や見廻りも適宜行われていた。

しかし、人工的な公園が立派であればあるほど、また施設が整っていればいるほど、何か底の浅い寒々とした感じをぬぐい去ることができない。立派であるとか、整っているという表現は、実は、万人にとってそうであるのではなく、ある特定の人たちにとってそうであることがよくわかった。立派なジョギングコースは、ジョギングをする人たちにとって立派であり、整ったゲートボール場は、ゲートボールをする人たちにとって整った場所なのである。特に、低年齢の子供たちが、遊びという時、それはサッカーや野球といった特定のスポーツを意味するのではない。水遊び、砂遊び、土いじり、草の葉むしり、あるいははだしで黙々と歩き回ることだといえる。つまり、こうした子供たちにとっては、公園は特定のルールのない大ざっぱな遊びをする多目的・多元施設でなければならぬようだ。

新しく引越してきたこの江戸川区には、いくつも娘と私が大いに気に入っているこうした公園が残っている。

区立A公園は野球場とサッカー場に使われているが、一方のコーナーにバックネットがあり、反対側の両サイドにサッカーゴールがおかれているといっただけの簡単なものだ。バックネットから内野のあたり、ゴールの前だけ土が露出しており、あとは一面雑草の草原である。もちろん施設がその程度だから、ママさんサッカーチームの練習場や町内ソフトボール大会が開かれ、公式大会などとは縁遠い、まさに草野球であり、草サッカー場である。

私たち父娘がこの公園に行くお昼前後はガラガラで、私たちは、よく自転車で公園のご真中にのりつける。まわりを見廻すとまさに草の海である。娘を自転車から降ろすとキャッキャックと喜んでいいる。都会では緑化が叫ばれ、申し訳程度に、緑が切り売り型で保存されるようになった。しかし、私が少年期田舎で経験した緑とは圧倒的な緑であり、生き生きとした力ある緑であっ

た。確かに公園の一区画内ではあるが、この公園の中に立つと緑の力強さを再び思い出すことができる。娘は元気に葉っぱをちぎっているし、時々現われる虫にびっくりしたりする。立派でも整ってもないが私たちには大切な公園のひとつである。

もうひとつ私たちがよく通うF公園は、やや人工色の強い公園だが、噴水の水を利用して低年齢の子供たちが、利用できる浅い流れが作ってある。男の子も、女の子もこの流れの中を丸裸体で、あるいは、パンツ一枚で、キャッキャックと遊びまわっている。少し大きくなると上流にある噴水の中で腰まで水につかって泳ぐ子供いる。お母さんたちもスカートをまくって噴水の中で子供と遊んでいる。話をすると少しばかりのけがや病気はいとわないうという「自然派」のお母さんが多いが、都会の光景にしてはほほえましい。私たちも娘のリュックに替えオムツとタオルと着がえを持って、この公園によくでかけるがその理由は次の二つだと思ふ。

もっとも大きな理由は、管理がうるさくないことであ

る。流れの中で丸裸体で遊んでいても、噴水の中でみんな泳いでいてもだからも注意されないことである。今だに噴水の中で泳いでいいのか、あるいはその噴水はどれくらいの水質なのか本当の所はよくわからない。しかし、まるで、自分のお子さんと自分の責任で自由にお使いくださいといわんばかりである。湯水がさわがれた今夏も、他の二つの大噴水の水は止められていたが、子供用の流れがある噴水だけは水量が減らされたもののおつと水は流しつづけられていたから、この推論はそんなに間違っていないだろう。

もうひとつの理由は、第一のものとも関連するが、自由に利用できる広い芝生地が流れのまわりに用意されていることである。芝生は、子供の着がえに好都合である。立たせたままでオムツをかえたり、何か一枚下に敷いて寝ころがらせるにしろ芝が一番いいようだ。また、帽子ひとつかぶせておけば炎天下でも自由に子供を歩きまわらせることができる。裸足でなるべく育てることに我が家では決めているが、夏の炎天下では、アスファル

トやコンクリート、石だたみ等のいわゆる西洋風の立派な公園はこの教育に全くなじまない。その点、土の公園はまさに午後一時・二時にはやはり熱い。裸足で歩くには、特に夏は自由に歩ける芝生地が最高だろう。

最近では、同じ芝生の公園でも芝生には立入り禁止の札があり、その横にベンチがおいてあるケースがしばしばである。幼児無視のいわゆる男性の発想であり、管理の思想である。へたなカーブを持ったベンチでオムツでも替えてみれば、そうした公園の不合理さがよくわかるはずなのである。

(川崎市平和資料室)